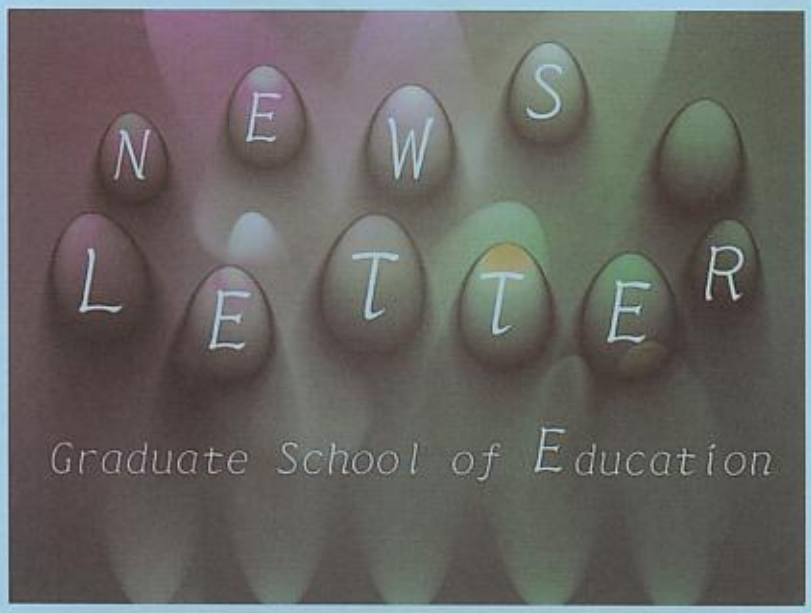
京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.8



2004.6

（目次）

● 巻頭言

歴史的な目覚めに ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 研究科長・学部長　藤原勝紀 ・・・・・・・・・・・ 2

● 研究ノート

教官から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育認知心理学講座　教授　吉川左紀子 ・・・・・・・・・ 3

院生から ・・・・・・・・・・・・・ 発達教育研究室 博士後期課程１年　川島大輔 ・・・・・・・・・・ 3

院生から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 臨床心理実践学講座Ｄ２　須藤春佳 ・・・・・・・・・・ 4

● 社会人院生から ・・・・・・・・ 教育科学専攻　専修コースM2　中尾敦子 ・・・・・・・・・・ 4

● 事務室より

法人化後の事務部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 事務長　村田宗一 ・・・・・・・・・・ 5

● 図書室より

図書室と図書業務紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 図書掛　掛長　爲石理恵子 ・・・・・・・・・ 5

● 臨床教育実践研究センターから・・・ センター長（心理臨床学講座　教授）　山中康裕 ・・・・・・・・・・ 6

● 留学生から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育学講座M2　田　世民 ・・・・・・・・・・ 6

● 諸記録 ・・ 7～9

① 入試結果　② 学位授与件数　③教育職員免許状取得状況　④ 人事異動

⑤ 招へい外国人研究者の記録　⑥ 奨学寄付金受入　⑦科学研究費補助金

● 諸報 ・・ 9～10

新任教官、事務官紹介

巻頭言

歴史的な目覚めに

研究科長　学部長　藤原　勝紀

いよいよ国立大学法人京都大学になりました。京都帝国大学（1897年）、新制京都大学（1949年）以来の制度的な大変換をしたわけです。この選択は、土台の構造的な変化ですから、当面の目に見える慌ただしい変化よりも、いまは身近に感じにくい所に本質が内蔵されているのだと思います。そうした点での見えにくさが、表面での圧迫感と将来への見通しのなさに繋がっているようにも思います。

平成16年4月1日は、午前から午後にかけての会議で、旧体制と新体制へと一気に早変わりの日でした。物凄い歴史的な内容が凝縮された一日だったと思います。この日が、京都大学創立150周年の頃には、どのような意味をもって振り返られることでしょう。また、法人化元年の新入生は、学生期の始めを、人生の来し方の中でどう語るのでしょう。

この間の法人化に向けた経緯の中で、意外なほどの保守性というか、変化よりも安定した毎日を過ごしたいと念じる傾向に気づかされることしばしばでした。それでも、ここに至っては、ともかく主体的に変革したのだと自他に言い聞かせて、相応の責任を果たしていかざるをえないのだと思います。

これからは、個人の意識や能力にウエイトが置かれるように感じます。法人化は、どこか講座や組織に安住していた面について、多くの点で個人の自己責任が問われる仕組みのようです。これまでは、いわば自己評価中心でよかったのかも知れませんが、これからは「こと・人・もの」について、他者・第三者評価に対する説明責任が求められましょう。

その意味では、いっそう個人の自由で主体的な判断や能力が活かされやすくなるかも知れません。しかし、よほど個々が自己責任を果たさない限り、ともすれば我が身息災的な勝手を生じやすくする可能性もあります。それが責任ある自由かどうかを区別するのは難しいところですが、組織運営や個々の構成員にとって、今後の大きなテーマだと思います。

この課題は、いうまでもなく、いま突然に発生したことではないと思います。学問自体が、自由で奔放な個人の知の動きでしょうから。そして身勝手な閉鎖性や私物化とは正反対に、社会や他者に開かれた普遍化へと方向づけられた営為であるからです。このことが、つまり学問及び学問に携わる個人の質として、あえて改めて責任と自覚を促される仕組みが、法人化の動向ではないかと思えるのです。

国から各国立大学法人へ、法人から各部局へ、部局から各講座・個人へと権限が委譲されたようにみえます。しかし、そこには国・法人・部局からの評価と責任が要請されます。その意味で、これまで以上に、個人や組織には身近な厳しさを伴う仕組みではないかと思います。

国立大学法人という「ばあい」において、「こと・人・もの」すべてを窮屈とするか、本質的な自由へと洗練するかが、いま学問自体のリアリティとして、京都大学、教育学研究科及び各自に問われていることを自覚しなくてはならないようです。

たしかに競争的・先進的という名の動力は認めざるをえないのですが、それが広い視野に立った他者と共存する眼差しとは裏腹に、排他的・身勝手な心の暴力にならないよう、まさに教育学研究科の存在理由の本質に迫る課題として、いまこそ21世紀の叡知を生成する動力にしたいものです。

教員・学生・事務職員をはじめ同窓の皆さんとともに、この歴史的な時を創造的に刻みたいと思います。教育学研究科・教育学部の人の群れ内外において、いっそう熱いエールの交換をお願いします。

教育認知心理学講座

教 授　吉川 左紀子

私が現在関心をもっているのは、顔に含まれる多様な情報がコミュニケーションにどのように影響を及ぼすのか、それらを通じて相手の気持ちを理解したり共感するメカニズムはどのようなものか、という問題である。とくに表情（感情状態）や視線（注意の方向）の認知に焦点を当て、心理実験や脳機能画像（fMRI）研究を行っている。具体例を挙げてみよう。変化する表情の短い映像クリップを作成して、変化速度を実験的に操作し、どのような感情が認知されるかを調べたところ、表情の変化速度が少し違うだけで、見ている人が受け取る感情の質が異なることが分かった。楽しい気持を伝える笑顔も、ゆっくりと変化すると「悪巧み」といったネガティブな意味に受け取られたりするのである。表情の意味を感知する心の働きは、驚くほど繊細である。

表情知覚と視線向きの関係についても、興味深いことが分かってきた。たとえば、怒りの表情を浮かべた顔は、正面向きの場合には（つまり知覚者のほうを向いている場合には）大変知覚精度が高く、一瞬の知覚でも正確に同定できるのだが、顔向きを変えると、知覚精度が低下する。ちなみに、笑顔についてはこうした顔向きのちがいによる知覚への影響は見られない。これまでの脳科学研究の知見から、怒りや恐怖のような脅威表情の知覚には扁桃体という神経核が関与していることが知られている。そこで、視線向きの異なる表情写真を使ってfMRIで扁桃体の活動を調べてみたところ、扁桃体の活動は、知覚者の方を向く怒り表情に対してとくに強くなることが明らかになった。人は、他者の表情を自己との関係の中で認知しているといえるかもしれない。今後こうした研究をさらに発展させて、他者への共感や感情伝染と言った現象の心的メカニズムにも迫れるのではないかと考えている。

表情や視線の認知研究には、種差、文化差、個人差などさまざまな切り口がある。研究のタネは当分尽きそうもない。

研究ノート

発達教育研究室
博士後期課程１年

川島大輔

私の専攻する生涯発達心理学は人間の一生を扱う学問分野ですが、私はその中でも特に老年期の死の問題に関心を持って研究を進めています。これまでこの分野においては、死の態度や不安に寄与する要因や、死の受容プロセスを明らかにすることに多くの研究者の関心が注がれてきましたが、私は老年期にある人々が語る言葉とその言葉によって紡がれる物語を見ることで、彼らの死に対する意味づけを捉えようとしています。

ところで個人の物語に見られる意味づけは当然社会文化的条件からの影響を免れることはできません。死の意味づけもまた同様ですが、私は特に、古来より死についての物語を提供してきた宗教に着目することで、意味の行為主体である個人と社会文化的影響としての宗教のどのような相互行為のうちに意味づけが構築されるのかを明らかにしていきたいと考えています。特に、日本人の死生観に大きな影響を及ぼしている仏教や日常生活に溶け込んでいる民俗宗教が死の意味づけとどのような関わりを持つのかに眼を向けることで、単なる一つの要因としての信仰の有無を越えた両者の関係性を明らかにしたいと考えています。

また、死の意味づけは各種宗教行事などに触れることで暗黙のうちに醸成されるという側面の一方で、様々なライフイベントにおける経験や重要な他者との明示的な関わり合いを通じて構築されるという側面も持ち合わせています。特に後者に関して両親の影響力は大きく、死に際した両親のあり方が死の意味づけの発達に大きく作用していること、つまり親が自らの死をもって子どもにその意味を教えるという世代継承の重要性は、近年教育現場において注目されている死の教育や、死の看取りの問題を抱える終末医療の実践現場に対しても興味深い示唆を与えるものではないでしょうか。

このような関心のもと、生き生きと自らの生と死について語る彼らの言葉に、今後も耳を傾けていきたいと思います。

臨床心理実践学講座Ｄ２
日本学術振興会特別研究員

須藤春佳

私は、思春期から青年期にかけての身近な同性同年輩関係について、その心理学的な意味の検討を研究テーマとしています。従来より、児童期から青年期にかけての同性同年輩同士の関係（主に友人関係）が、人間の精神発達上重要であるとの指摘はなされていますが、心理発達的に自己形成が課題となる青年期には、特に重要な役割を果たすと考えられます。それは、身近な同性同年輩の存在が、自分と同じような姿形をし、身体を備えた存在であり、鏡のような存在として自らを映し見やすい「鏡映関係」にあると考えられることが大きいと考えています。これまで、主に青年期の自己形成と身近な同性同年輩関係との関連について、研究を進めています。

米国精神科医であったSullivan（1953）は、児童期から青年期への移行期にあたる、前青年期の同性同年輩の親友関係をchumshipと名づけ、この関係性においてもたらされる安全保障感が治療的であるとして重視しました。卒業論文では、このchumshipに着目し、調査研究を行いました。さらに修士論文では、同性同年輩関係における支持的な側面だけでなく、葛藤的な側面も取り上げ調査を行うことで、より多角的にこの関係を捉えることを試みました。これらの調査結果から、同性同年輩との関係のもち方と、青年期の自己形成とのには関連が見られることがわかりました。

同性同士の関係を研究していくと、性差が顕著にあらわれることに気づかされます。性差については、生物学的、社会学的な観点などから多大な研究がなされていますが、今一度、他分野の知見も含め心理学的な観点から性差について考察を深めたいと考えています。

一方、私は普段の大学院生活において、心理臨床実践活動も行っています。Chumshipの重要性は、臨床実践の中から唱えられましたが、なぜその関係性が治療的であるのか、発達促進的であるのかといった事は、日々の実践活動に触れる中での感覚、直感、思考力などを動員して見出されたものであると考えます。私自身も心理臨床実践活動に携わる者として、臨床場面における関係性について考える中から、同性同年輩関係についての考察を深めることを目指せたらと思います。

社会人院生から

教育科学専攻　専修コースM2

中尾敦子

一般社会においては、リタイヤー世代といわれる私が、今"京都大学大学院"に「正規学生」として所属している。これまで所属した世界とはいささか遊離した異質文化の世界に迷い込んだようであり、時として私が萎えていく。そんな時に、私を奮い立たせる道具は自身が生涯学習であり、研究そのものであると信じる『自負心』だけである。何十年ぶりかで体験する研究生活では、青春時代には兆候を見せることもなかった『私』の貪欲な知的好奇心が一人歩きをする。結果、稚拙ではあるが、緩やかな歩みで、多様な知識を吸引することに始まり、実践と対比する。学園紛争、急速な経済発展、バブル崩壊とめまぐるしい20世紀を、専業主婦として生きた『私』がここに存在する。昔、ある社会学者が「専業主婦に敗者復活はない」と予言したことがある。確かに、自然科学分野では熟年の学びは不可能だろう。他方、社会科学分野は生活者の『経験知』が学問に貢献していくのではなかろうか。傲慢な表現が許されるなら、当事者の『経験知』は学びの最強の武器になると信じている。経験に実証されない理論は、砂上の楼閣でもある。

そこで熟年期の私の研究課題は、若年期に専攻した自然科学でなく「高齢者の学習」「生涯学習」を理論化し、言語化することを目指している。これまで、私は先祖から継承した江戸期に創設された社団法人で『心学』にかかわり、女性センターや社会教育施設での講義や学習支援者としての活動を重ねてきた。その途上で遭遇した矛盾に立ち向かうエンパワーメントをつけるのに、ここでの学びが役立つと信じたい。「死にいたるまで自分らしく生活できる社会を、ジェンダーに敏感な視点で」を理論化するため、広範で専門性の高い知的欲求を満たしてくれる学びと研究が、私の研究課題で実践そのものである。

◆法人化後の事務部

事務室より
・clerical room・

事務長
村田宗一

国立大学法人京都大学になって1ヶ月が過ぎました。事務部も教育学部事務部から教育学研究科事務部となり、庶務掛が総務掛と改称しましたが、まだまだ移行中であるのが現状です。

事務部では、教職員が労働基準法等の適用を受ける労働者となったため、就業規則及び労使協定などによる、職員の勤務時間、休憩時間の変更や超過勤務の規制、教員の専門業務型裁量労働制の導入等、新制度への対応におわれています。また、物品等の購入手続きにおいても、パソコンによる教員等からの購入依頼、会計掛のみの発注行為という新システムが十分機能するにはもう少し時間がかかりそうです。

このたびの法人化に伴い、研究科長、研究科への権限委任等が多くなりました。例えば教員への予算配分にしても、今までは、校費、旅費、等々に区分され、それぞれに予算額ありましたが、今後は、教育研究事業費となり、それを物品購入や旅費等にどれくらい使用し、またそれが研究用か教育用かに区別して予算化しなければならなくなり、その権限は研究科長にあります。そして、これに基づく支出、決算には説明責任が発生します。その他にも研究科長及び研究科が独自に企画・運営し、責任を負う事項が増えました。

このように、法人化により研究科も事務部も変わらなくてはならなくなりました。事務部は従前同様、教育、研究をサポートしていきますが、今まではどちらかというと受身的な仕事の仕方で多かったように思われます。しかしながら、今後はいままでの事務経験を生かし、研究科長及び研究科のために積極的な姿勢で取り組んでいきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いします。

◆図書室と図書業務紹介

図書室より
・library・

図書掛　掛長
爲石　理恵子

この4月から教育学研究科図書掛勤務となりました。新参者ですが、図書室とその仕事を紹介させていただこうと思います。

仕事初めは、新入生ガイダンスへの参加からでした。ニューズレター前号（7号）で広報されていたように、各回生ごとの履修指導時の「図書の利用について」の説明、教育学部向け附属図書館のオリエンテーション（新入生と新修士はほぼ全員出席）に参加して、研究科・学部に所属する人たちへ、文献検索・収集へと続く図書の利用についての大変丁寧な案内がされていると思いました。その結果、新入生の方々の図書室利用が例年より多いようです。

閲覧室1階は、参考図書、開架地下書庫には製本雑誌と、NDC分類順に配架された図書が置かれています。一部（別室）閉架になっていますが、利用頻度の比較的低い分野のものを収納しています。さらに、別棟閉架書庫（総合博物館3F）にNDC分類6類～9類、博士論文、修士論文、卒業論文、各種文庫、コレクション類があります。この文庫・コレクション類には、高橋文庫、小西文庫、現在受入作業中の篠原文庫が含まれ、日本の教育学研究の系譜が見て取れるものとなっています。

整理業務と閲覧・参考業務の分担は分かれていますが、昼休みの閲覧カウンターは全員交代で行います。私も担当者付き添いの下、週1回出ています。貸出・返却、所蔵調査等ほぼ切れ目なく利用者の来室があり、丁寧な応対がなされています。しかし、出納業務はまだマニュアルで行われており、自動貸返装置を含め、閲覧システムが導入できれば、利用者はもとより、図書室の仕事もずいぶん軽減されると思われるのですが。ただしそれには、少なくとも開架図書の遡及入力が必要です。現在、蔵書冊数14万冊中遡及冊数は5万冊強ですので、OPACで検索できるのは全体の36%です。遡及入力を促進して、検索効率を上げるのはもちろん、利用の効率化を図りたいところです。解決すべき課題は多々あります。国立大学法人となった今年から、すべての図書・雑誌を図書館業務システムで取り扱う事となりました。未解決の問題、障害も予想されます。一つ一つ、解決して行きたいと思っています。

臨床教育実践研究センターから

センター長（心理臨床学講座　教授）　山中康裕

久しぶりにセンター長を拝命した。以前の時は、ちょうどこのセンターが初めて立ち上がった1997年のことで、だから、無論、初代であった。あのときには、いくつかの思い出がある。とりわけセンター長拝命が教授会で決まったその日に、総長に直接お会いし、助手の件をお願いしたことだ。兼務・兼務の激務の中で、リカレント教育や公開講座や公開講演など、学外に向けての実務が満載のこの仕事を、助手なしでは到底遂行不可能であることを訴えたのだった。当時、井村総長であったが、即座にその意味と必要性とをご理解ご判断くださり、今、黒川さんがいる席を約束してくださったのである。

今回、来年退職というこの時期に、おそらく有終の美をとの教授会構成員各氏のご配慮であろうか、2度目の拝命とはなったが、相変わらず、この助手の席は大学預かりの身のままなのである。今年から独立法人化して、本センターのように、数少ない確実な収入源のある文系施設としては、その体制を基礎からはっきりと確立しておく必要があるのだ。今の副学長のお一人は、前の前の本センター長の東山さんであるが、そこら辺りを勘案して、ぜひ、定員化して頂きたいものである。金の問題よりも、対社会的に影響の多いものであるし、教師と臨床心理士の双方を射程にしての再教育は、昨今依然として増加傾向にある不登校やいじめや非行や乖離などの小中学生の諸問題にしっかりとした指針やアドヴァイスこそが求められているからだ。さて、研究科に臨床実践指導学講座も発足した今年、本センターの役割は、さらに大きく、かつ広範になろうから、時代に先がけての、幾多の試みが待望されている。今年から、客員教授や客員助教授も大幅に一新されて、新たな体制で臨むことになっているが、研究科こぞってのバックアップをも更にお願いして、さらなる前進をせねばならないと、自らに言い聞かせている昨今である。どうか、よろしくお願い致します。

留学生から

教育学講座M2　田　世民

■京都で学ぶ喜び

かねてからの日本留学の夢を叶え、はや三年目に入った。光陰矢のごとしとはいえ、つい最近だったような気がする。台湾出身の私は、中学卒業後入学した五年制の商業専門学校で日本語を習い始めた。いつか日本の土を踏んで日本語を話そうという願望は、五十音を覚えた当初からあった。その思いを遂げたのは5・6年前、友達三人で日本へ旅行に来た時だった。その旅で京都の町並みや文化や歴史に魅了された。いつかまたここに来る、私は心の中でそうつぶやいた。そして、2002年4月、ついにその日がやって来た。しかも留学という形で実現できたのはまるで夢のようであった。

最初の頃はホームシックにもかかった。しかし先生がたや研究室の皆さんに熱く受け入れられ励まされたので、二週間も経つか経たないうちに、京都の生活にすっかり溶け込んでいった。大学の講義は私にとってとても新鮮で、刺激をたくさん与えられた。研究生だった最初の一年間のゼミは戸惑い、なかなかついていけなかったが、今は慣れてきた。もう少し活躍してもよかったかもしれないと今は思う時もある。

いま私は近世日本の儒学思想を研究し、修士論文を作成している。当初は自分の研究と教育学講座という所属の関係に違和感があった。今はむしろ、自分の研究を進めていく中で、逆に教育とは何かという原点を考え直すことができる、ということに気付いた。じっさい、教育史の知識の蓄積が思想史研究を豊かにする土壌にになるに違いない。とくに、近世日本の教育思想に接近することによって、思想史研究を目指す私には新たな視野を開けてくれているとつくづく感じている。

この頃ようやく研究の手応えを掴めたかと思う。これから一日一日を大事にして、大好きな町ー京都で悔いを残さない留学生活を送っていきたい。

諸記録

◆平成１６年度入試結果

・教育学部

日　程　等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前　期　日　程	４０	１６２	１５８	４２	６３
後　期　日　程	２０	１８８	１０６	２１	
第３年次編入学	１０	４６	４５	１１	９

・教育学研究科

課　程　等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	１８	46(4)	45(4)	36(3)	35(2)
		臨床教育学専攻	１４	82(1)	82(1)		
	教育科学専攻(専修コース)		１０	31	31	１１	１１
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	8	8	1	1
博士後期課程編入学			若干名	10	10	2	2
臨床実践指導者養成コース			4	13	13	4	4

(　　)の数は外国人留学生で内数

◆平成１５年度学位授与件数 (H16.3.31現在)

学　位　名　等		授与者数
学士	教育科学科	７５
	教育社会学科	1
修士	教育科学専攻	３１
	臨床教育学専攻	１２
博士	課程博士	3
	論文博士	6

◆人事異動（H15.10.02～H16.04.01）

・平成15年12月16日付け

東山　紘久　教授　　大学院教育学研究科長、教育学部長　辞任

東山　紘久　教授　　京都大学副学長併任

藤原　勝紀　教授　　大学院教育学研究科長
教育学部長
（任期　15.12.16～17.03.31）

齋藤　直子　助教授　東京大学大学院総合文化研究科より昇任

・平成16年3月31日付け

小野　文生　助手（教育学講座）　辞職
金田　茂裕　助手（教育認知心理学講座）辞職
薄葉　毅史　助手（教育社会学講座）　辞職
林　　美輝　助手（生涯教育学講座）　辞職
鈴木　俊之　助手（比較教育政策学講座）辞職
鶴田　英也　助手（心理臨床学講座）　辞職

[redacted]

◆教育職員免許状取得状況

平成11年度（1999）

中学校専修免許状	—
中学校１種免許状	15
高等学校専修免許状	1
高等学校１種免許状	18
養護学校１種免許状	1
養護学校２種免許状	—

平成12年度（2000）

中学校専修免許状	1
中学校１種免許状	13
高等学校専修免許状	1
高等学校１種免許状	14
養護学校１種免許状	3
養護学校２種免許状	1

平成13年度（2001）

中学校専修免許状	1
中学校１種免許状	8
高等学校専修免許状	1
高等学校１種免許状	13
養護学校１種免許状	2
養護学校２種免許状	—

平成14年度（2002）

中学校専修免許状	—
中学校１種免許状	8
高等学校専修免許状	—
高等学校１種免許状	16
養護学校１種免許状	2
養護学校２種免許状	—

平成15年度（2003）

中学校専修免許状	0
中学校１種免許状	11
高等学校専修免許状	0
高等学校１種免許状	21
養護学校１種免許状	2
養護学校２種免許状	0

・平成16年4月1日付け

東山　紘久　教授（臨床心理実践学講座）　辞職
（国立大学法人京都大学理事へ）

赤沢　早人　助手（教育方法学講座）　辞職（福岡教育大学教育学部助手へ）

竹内　　洋　教授　　評議員
（任期　16.04.01～17.03.31）
山中　康裕　教授　　附属臨床教育実践研究センター長
（任期　16.04.01～17.03.31）
鈴木　晶子　教授　　現代教育基礎学系長
（任期　16.04.01～17.03.31）
吉川左紀子　教授　　教育心理学系長
（任期　16.04.01～17.03.31）
川崎　良孝　教授　　相関教育システム論系長
（任期　16.04.01～17.03.31）
西岡加名恵　助教授　教育科学専攻教育方法学講座　教職科目担当　採用
（鳴門教育大学学校教育学部より）
佐藤　卓巳　助教授　教育科学専攻生涯教育学講座　採用
（国際日本文化研究センターより）
中池　竜一　助手（情報関連）　採用
石原　　宏　助手（心理臨床関連）　採用

[redacted]

◆招へい外国人研究者の記録

招へい外国人学者

○ 氏　　名　Marta Gil Lacruz（ﾏﾙﾀ　ｼﾞﾙ　ﾗｸﾙｽ）
現　　職　サラサゴ大学社会科学・人文科学部　教授
活動内容　「青年のライフスタイルと健康－文化間比較アプローチ」の研究
受入講座　教育認知心理学講座
受入教員　子安　増生　教授
受入期間　16．3．2　～　16．5．30

○ 氏　　名　熱依汗 帕塔爾（ﾚｲﾊﾝ　ﾊﾟﾀｰﾙ）
現　　職　新疆師範大学教育科学学院　助教授
活動内容　多文化他民族社会における教育の探求についての研究
受入講座　教育学講座
受入教員　辻本　雅史　教授
受入期間　16．4．1　～　17．3．31

◆奨学寄附金受入

寄附金の名称	寄　附　目　的	寄　附　者	研究担当者
楠見孝助教授に対する研究助成金	「広告情報の反復呈示がリスク認知と安心感の形成に及ぼす効果」に対する研究助成	財団法人 吉田秀雄記念事業財団	楠見　孝

◆科学研究費補助金

１６年度

研究種目	研　究　題　目	研究担当者
基盤Ｂ	進路意思法定における認知・感情過程のモデル化	楠見　孝
〃	フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法	山田洋子
〃	かしこい市民を育む経済学教育の展開とその教育心理学的評価	子安増生
〃	発達早期における視線および表情理解の発達と障害：社会的参照行動の再検討	遠藤利彦
〃	遺伝子診療における心理臨床的援助に関する研究	伊藤良子
〃	民間資金活用による教育財源調達手法の有効性に関する国際比較研究	高見　茂
基盤Ｃ	心理療法と癒しの文化を巡る臨床心理学の開発的研究	皆藤　章
〃	表情および視線の認知機構に関する実証的研究	吉川左紀子
〃	日本植民地統治下台湾におけるミッション・スクールの研究	駒込　武
〃	教育詩学(ポイエティーク)による「現場」のテクスト分析　ー教育を語る言葉の再生ー	鈴木晶子
〃	児童生徒の潜在的能力開発プログラムとカリキュラム分化に関する国際比較研究	杉本　均
〃	高齢者への心理療法的かかわりに関する研究ー箱庭を介したかかわりからー	岡田康伸
〃	言語産出と作動記憶を支えるタイミング制御機構の解明	齊藤　智
〃	「男女共同参画」「異文化共生」を展望する「興味・習い事」プログラムの研究	渡邊洋子
〃	学力向上をめざす評価基準と評価方法の開発	田中耕治
〃	自己信頼とケアの道徳教育：エマソン、デューイ、カペルの道徳的完成主義の研究	齋藤直子
〃	昭和戦前期における右翼雑誌のメディア学的研究	佐藤卓巳
萌芽	痛みの認知・表現・推測に関する認知科学的アプローチ	子安増生
〃	「三項関係感情」の実態とその発生メカニズムに関する探索的研究	遠藤利彦
〃	仮想空間を利用したコミュニケーション・システムの認知的評価と応用	楠見　孝
〃	地域通貨の生涯学習論的研究	前平泰志
若手Ｂ	国家施設型大学から法人型大学への転換過程に関するドイツ・オーストリア間の比較研究	金子　勉
〃	「目標に準拠した評価」のためのポートフォリオの活用に関する国際比較調査ーパフォーマンス課題とルーブリックの開発を中心にー	西岡加名恵

諸報

◆新任教官・事務官紹介（「　」内は本人の抱負）

[redacted]

編集後記

今回で「ニューズレター」も第８号となりました。本年４月から編集関係のスタッフも大幅に入れ替わりました。また昨年後期、本年４月には新しい先生方、事務スタッフの皆様方をお迎えし、研究科も法人化という制度改変を受けて新しい出発を始めました。第１号から代わり映えしないのはとうとう広報委員長だけとなりました。内容がマンネリ化しているのではないか、新機軸が見られないのではないか、と最近思い悩むことしきりです。今高等教育機関は激しい変化の最中にあります。それゆえニューズレターは、皆様方のお考えを披瀝して頂き情報交換の場として活用して頂く重要な役割を担っていると思います。どうか皆様方からの積極的なご意見・ご提案をお寄せ下さい。先生方、事務職員の皆様方にはお忙しい中、いつも心良くお引き受けくださることに心から感謝申し上げますとともに厚く御礼申し上げます。今後ともご支援のほどお願い申し上げます。

(S.T.記)

京都大学教育学研究科
・教育学部広報委員会（平成16年4月～）

委員長　髙見　茂 教授
（比較教育政策学講座）

委　員　藤原　勝紀 教授
（教育学研究科長・学部長）

委　員　やまだ　ようこ 教授
（教育方法学講座）

委　員　伊藤　良子 教授
（臨床心理実践学講座）

委　員　村田　宗一 事務長
委　員　眞継　芳春 総務掛長
委　員　津知　哲夫 教務掛長

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003

表紙デザイン　山田旬子